

渡良瀬遊水池

●自然と歴史を次の世代へ●



渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会編

ストップ!! 遊水池の開発

谷中村が廃村にされた後、よみがえった遊水池の自然が開発の名目で破壊される危機が幾たびもありました。谷中湖が造られ、ゴルフ場が造られ、大小の沼がなくなりました。遊水池の自然を愛する人々、谷中村遺跡を守ろうとする人々、多くの人たちの努力で止めることのできた開発もありますが、今も問題を抱えています。

谷中湖(渡良瀬貯水池)を自然の湖へ

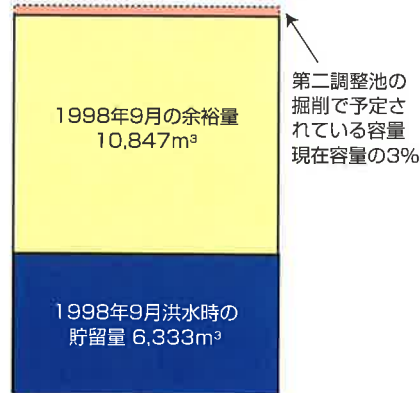
谷中湖は、利水(首都圏への供水)・治水などを目的に1989年につくられました。しかし、渡良瀬川の最下流で生活排水などを多分に含んだ水を貯水するため、植物プランクトンの異常増殖が進行し水質が悪化し悪臭水となり、首都圏の水ガメとしては役に立っていないといえません。また、護岸はコンクリート製で、水位は調節されて年間3.5~6.5mも変動するため、水生植物群落が形成されず魚も産卵できない、人工的湖となっています。

首都圏の水ガメとして役立っていないのですから、その利水目的を放棄して、コンクリート護岸を砕き、水位変動の操作をやめ、自然の湖として再生することを住民協議会は提案しています。水草が生え、魚が泳ぎ、水鳥が営巣する自然の湖でこそ、レジャーも安らぎのあるものになるでしょう。

第二調節池の大規模掘削は必要か？

第二調節池に第二貯水池をつくる計画がありました。これは、利水・治水を目的として1,140万 m^3 の貯水容量を確保するために大規模な掘削を行うものでしたが、10年余におよぶ住民協議会の反対運動で、2002年8月に中止が決定しました。

渡良瀬遊水池の
現在の治水容量 17,180万 m^3



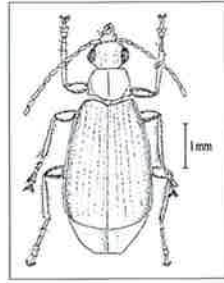
第二調整池の掘削で予定されている容量
現在容量の3%

わずか3%の治水容量の増強

ところが、2003年度になってから、第二貯水池計画のうち、治水目的500万 m^3 の掘削を復活させる計画が浮上してきました。その容量は、第二調節池全体を1m掘削して確保するもので、その掘削が行われれば遊水池の自然は非常に大きな打撃を受けます。

渡良瀬遊水池は、もともと洪水調節を目的につくられたもので、洪水調節容量はすでに17,180万 m^3 も確保されています。500万 m^3 の掘削計画とは、それをわずか3%増加して17,680万 m^3 にするとということです。500万 m^3 の掘削が本当に必要なのでしょうか。

昆虫



遊水池には
多種のゴミムシが生息。
コルリアトクリゴミムシ



各地で消滅の危機にあるが、例外的に遊水池に多産する
アカガネオサムシ



水草の豊かな池に飛ぶチョウトンボ



渡良瀬遊水池以外では、
ほとんどみつからない
ワタラセハンミョウモドキ

全国的にアメンボが減少。
絶滅危惧種のエサキアメンボ

哺乳類



ネズミや野鳥を狩る
キツネ

渡良瀬遊水池の自然と生物

渡良瀬遊水池は、本州以南では最大のヨシ原が特徴です。かつて谷中村・赤麻沼などがあって、古くから人々の営みのあるところでした。鉱毒に荒らされ村も沼もつぶされましたが、自然の再生力によって、広大なヨシ原、点在する池、川沿いや屋敷跡の樹林、人里の歴史を持つ豊かな自然がよみがえり、生物たちの興味深い生活が繰り広げられています。

【植物】は、約700におよぶ多様な種類、特に絶滅危惧種（準絶滅危惧を含む）は、49種も確認されています。ヨシ焼の後にびっしり生えるトネハナヤスリ・エキサイゼリなどは、遊水池が最後の拠りどころです。チョウジソウの青い花、ノウルシの黄色い群落、ヌマアゼスゲも驚くほどたくさん見られます。2005年のワタラセツリフネソウの発見は、遊水池の自然が解明しつつされていないことを示しています。

【昆虫】は、約1600種。湿地性昆虫の貴重なものが生息しています。オオモノサシトンボ・ムモンチャイロデントウ・ワタラセハンミョウモドキなど50種が、県内では遊水池のみの記録です。新種の発見が相次ぎ、2005年にはワタラセツブゲンゴロウが報告されました。

【野鳥】は、約230種が遊水池を利用しています。初夏にはオオヨシキリの大合唱のなか、セッカ・ヨシゴイ・バン、クイナなど、多彩な鳥たちが繁殖します。春秋には、シギ・チドリ類の長距離の渡りの中継地として重要です。越冬するカモ・カイツブリ類は、1万羽を超えます。食物連鎖の頂点にある猛禽類の種類と個体数の多さも特色です。サシバ・オオタカなどが繁殖し、冬には、ミサゴ・ノスリ・チュウヒ・ハヤブサなどがやってきます。

【哺乳類】では、アズマモグラ・アカネズミ・ハタネズミ・ハタネズミが、猛禽類やキツネ・イタチの餌になっています。キツネ・タヌキ・コウモリなど、詳細はこれからの調査が待たれます。

自然の中では、ひとつの変化が次々に他に影響を及ぼします。遊水池の豊かな自然を、生物たちのかけがえのない生存の場として保全していきたいものです。



メスにエサを渡すチョウゲンボウ





春の遊水池を彩る **チョウジソウ** (絶滅危惧種) 新種として命名された **ワタラセツリフネソウ**



ヨシ焼きの後、春だけ生育する **トネハナヤスリ** (絶滅危惧種)



日当たりのよい水泥地に生える1年草の **ミズオアオイ** (絶滅危惧種)

植物

昔ここに谷中村があった 渡良瀬遊水池 100年の歴史

渡良瀬遊水池は、100年前までは谷中村があったところです。栃木県の南端、渡良瀬川の最下流に位置し、3000人が生活する農業と漁業の村でした。時折襲う洪水は、山地の肥沃な土をもたらし農作物はよく実りました。

谷中村の名は、明治期最大の社会問題であった鉱毒事件で知られています。

明治10年代から、上流の足尾銅山からの鉱毒の流出により、渡良瀬川沿岸地域では作物が実らず魚もとれない鉱毒被害が激化・拡大していきました。被害民たちは、政府への請願運動に立ち上がります。

栃木県選出衆議院議員の田中正造は、10年にわたって国会で足尾銅山の操業停止を訴え続けますが効なく、明治34年議員を辞職して明治天皇に直訴しました。それを機に鉱毒民救済の世論が盛り上がります。正造は、谷中村に入り村民と行動をとめます。

明治政府は、谷中村を廃村にして遊水池化することで鉱毒運動の鎮静化を謀り、村民たちの多くは父祖伝来の地を追われました。16戸が踏みとどまり抵抗しましたが、明治40年の強制破壊で、谷中村は滅亡しました。

昭和51年、渡良瀬貯水池造成工事に谷中村遺跡が呑み込まれそうになったとき、旧住民を中心とした「谷中村遺跡を守る会」が発足して、建設省に抗議し、遺跡の一部（雷電神社跡・延命院跡・役場跡など）が守られました。貯水池のハート型にくびれた所が、遺跡保存地域です。

野鳥



初夏のヨシ原に歌う **コヨシキリ**



春と秋に立ち寄る **ツルシギ**

ヨシ原を滑空する **ハイロチュウヒ**



田中正造



足尾・渡良瀬遊水池 略年表

- 1877(明10) 古河市兵衛、足尾銅山精錬所創業。
- 1885(明18) 足尾鉱毒、渡良瀬川沿岸に広がる。
- 1891(明24) 田中正造、第二回帝国議会で鉱毒問題を質問、鉱業停止を要求。
- 1896(明29) 大洪水。鉱毒被害は渡良瀬川・利根川・江戸川流域の1府5県。
- 1897-98 鉱毒被害民3回にわたる東京押し出し(要請行動)。
- 1900(明33) 第4回東京押し出しで川俣事件勃発。逮捕者100余名。鉱毒問題に世論高まる。
- 1901(明34) 田中正造、国会で最終演説、議員を辞して明治天皇に直訴。
- 1904(明37) 正造、谷中村に入村。栃木県議会、秘密会で谷中村買収遊水池化案を可決。
- 1907(明40) 栃木県、谷中村残留民家屋を強制破壊。
- 1913(大2) 田中正造死去。
- 1918(大7) 渡良瀬川を遊水池に流し込む付け替え工事。
- 1945(昭20) 赤麻沼が流れ込む土砂で埋まる。
- 1970-72 第一・第二洪水調節池越流堤工事完了。
- 1988(昭63) アクリメーション計画(レジャーランド化)工事始まる。
- 1989(平1) 渡良瀬貯水池(谷中湖)完成。
- 1990(平2) 渡良瀬貯水池からの放流により、江戸川流域で水道水のカビ臭事件が発生。
- 1998(平10) 第三洪水調節池の越流堤が完成。
- 2002(平14) 国土交通省、第二貯水池建設計画の中止。
- 2006(平18) 谷中村廃村100年。

1998年9月洪水の時でも、6割以上の余裕がある遊水池

国の計算では、増加する17,680万m³の調節容量が必要となるのは、200年に1度という、大洪水が来た時だけです。最近の最も流量が大きかった1998年9月洪水でも、渡良瀬遊水池の洪水調節容量は6割以上の余裕がありました。

堤防等の整備を進めよう

現在、遊水池に流れ込むいくつかの河川の堤防の整備状況は、40~50年に1度の洪水に対応できるかどうかという段階です。200年に1度という大洪水が来たら、まず周辺河川が氾濫する危険が生じます。遊水池にあと500万m³の調節容量を増強しても、それが役立つ前に、周辺河川は氾濫してしまうのです。

治水対策として力を入れるべきことは、地域の安全のために周辺河川の堤防等の整備を進めることです。遊水池の500万m³の掘削に巨額の公費を投じることは、治水対策として誤った選択であり、遊水池の自然を破壊するだけです。

渡良瀬遊水池をラムサール条約の登録湿地へ そして、エコミュージアムにしよう!

「ラムサール条約」(湿地と湿地の生物を守るための国際条約)の精神は、湿地を賢く利用しつつ、その生態系の自然特性を守っていくことにあります。登録湿地に指定されれば、渡良瀬遊水池の素晴らしさを世界に発信し、遊水池の自然を楽しみつつ保全し、新たな「まちおこし」を進めることができます。

さらに、遊水池を「自然と歴史の野外博物館(渡良瀬遊水池エコミュージアム)」
「自然を楽しみ、観察し、自然から学ぶ場」
にしていきたいと思います。

例えば…… 第一調節池=自然の湖で多種のレジャーを楽しみ、
 鉱毒の歴史を学ぶ
第二調節池=自然観察のできるサンクチュアリ
第三調節池=コウノトリもくする自然再生地



「渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会」は、
遊水池のかけがえのない自然と歴史を
次の世代に引き継ぐために活動する市民団体です。



協議会のできるまで

広さ33km²の日本最大の遊水池・渡良瀬遊水池では、多くの開発工事が行われてきました。1989年には、巨大な貯水池(谷中湖)が完成し、更に二つのゴルフ場の造成など、開発が次々と進められようとしていました。本会は、1990年、かけがえのない自然と公害の原点としての重い歴史を持つ遊水池を開発計画から守るために発足しました。

協議会の活動内容

本会は、遊水池のすばらしさを多くの人々に伝えるため、また、開発を阻止する科学的なデータを得るため、講演会・自然観察会・探鳥会、環境調査(野鳥、植物、昆虫など)、関係省庁等との交渉、署名運動など、さまざまな活動を行ってきました。谷中湖が下流水道水のカビ臭事件を引き起こしたことから、谷中湖の水質調査にも力を注ぎました。

これからも、①「第二貯水池建設などの開発」に反対し、②「遊水池をラムサール条約の登録湿地にしてエコミュージアムプランを実現していくこと」をめざして活動を続けていきます。

本会を母体として、足尾と渡良瀬の自然の再生を目的とする「わたらせ未来基金」が、2001年に発足しました。<http://www.eco-online.org/watarase/>

会員になってください

(年会費 個人1,000円、団体3,000円)

本会の活動の趣旨に賛同される方は、郵便振替で会費をお送りください。

会報、会の催しの案内をお送りします。

出版物

会報「わたらせ遊水池通信」(年4回)、ブックレット「新・渡良瀬遊水池」、「渡良瀬遊水池」、ガイドマップ「渡良瀬遊水池」、絵はがき「渡良瀬遊水池の野鳥たち」、英文パンフレット「Watarase Marsh」、提言書「渡良瀬遊水池・エコミュージアムプラン」、シンポジウム記録集「渡良瀬遊水池のこれから」、講演会記録集「渡良瀬遊水池を世界にラムサール条約で新たなまちおこしを」、報告書「渡良瀬遊水池 第二貯水池計画中止がもたらしたもの」、「渡良瀬遊水池の動植物実態調査報告書」



渡良瀬遊水池 ——自然と歴史を次の世代へ——

発行者 渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会 (代表世話人 高松健比古)
事務局 猿山弘子 (〒328-0053 栃木県栃木市片柳町4-16-1 TEL&FAX 0282-23-1078)
郵便振替 00370-4-43149
写真提供 大川秀雄、日向野哲夫、野本定司、青木章彦、寺内為敏

●このリーフレットの作成には日野自動車グリーンファンドの助成を受けました。06-4,10000